

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ぼくがアート写真を製作する工程は、ほとんど無為の時間の連続だ。撮影場所を探すために車のハンドルを握るだけで、一日はあっという間に過ぎていく。作品にフィットする場所はそうそうないので、収穫のない日は、それこそなにをしていたのか分からないような時間を過ごす。

しかし、通り過ぎる風景のなかに見ていたものや、つらつらと頭のなかに巡らせていた些細なイメージは、とても純粹で静かな時間のつながりの賜物だ。いろいろな情景は目に焼きついていて、整理のつかなかったことに頭のなかでけりがつこうともある。さまざまなきことが、普段よりも客観的に感じられ、より純粹な心になる。

また、目的であった場所探しという意味では、すぐには使えない場所ばかりであっても、なにが役に立つかは自分でも分からないものだ。まったく別の機会に、通り過ぎた場所のどこかが、ほかの作品の舞台に化けることもいくらかもある。そういう意味では、人に会わず、言葉もしゃべらず、移動するしかなかった数日は、それはそれで〈名もなき大切な日々〉だったということはあるのだ。

① アートをするというのは、こういった空白の時間を、ありのまま受けとめるということではないかと思う。そのプロセスや行動に意味を求めすぎないこと。ものごとを効率化しているようなものを詰め込むのではなく、むしろどんな状況も、そのままよく味わうということだ。それは、自分を純粹な状態に保つことでもある。アートをつくらうと思う人の内面には、自発的で純粹な面が生まれてくる。カタチとしての作品も大切だが、それはある意味では、過ぎていく時間の副産物ではない。役に立つかどうかだけで、人やものごと、時間の価値を決めない生き方を、アートは助けてくれる。無駄なものはないのだ。

一般的な価値基準ではなかなか測れないアートというものに日々接している。生活のなかでも、ものの見方に影響がでてくる。たとえば、作品を撮りはじめの際、やるべき工程のすべてをクリアに整理できているわけではなく、完成形がイメージできないまま発進してしまうこともある。どこに向かっているのか自分でもよく分からない。撮っていくうちに、目指すイメージが少しずつに見えるはじめ、そこから徐々に全体の構成を練りなおし、完成に近づけていく。もちろん、撮影の最中のことなので、すべては瞬間的なスピードで頭のなかで進行していく。撮る風景や被写体の変化にも臨機応変に対応しながら、見えて

1 アートをする とあるが、本文中で筆者は、アートをするとはどういうこととであると述べているか。その内容についてまとめた次の文の a、b に入れるのに最も適しているひょうじつぎのことを、本文中から抜き出さない。ただし、a は十九字、b は十一字で抜き出し、それぞれ初めの六字を書きなさい。

アートをするとは、 a をありのまま受けとめることであり、 b ことである。

② アートというものに日々接していると、生活のなかでも、ものの見方に影響がでてくる とあるが、アートに日々接することでももの見方に影響がでてくる具体例として、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。 に入る内容を、本文中のことばを使って七十五字以上、九十五字以内で書きなさい。

作品の完成形がイメージできなかったとしても、 と生活のなかでも思うようになる。

3 次のうち、本文中で述べられていることから内容の合うものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア アートの世界においては、作品を見る側が理解を深められるような環境を提供するという目的で、作品の製作をはじめ段階で、はっきりとした目標や答えを設定しておくことが求められる。

イ 人間は自分の行動すべてに説明をつけようとすることにより窮屈さを感じているが、自分の心と世の中がフィットしないときこそ、アートの出番であり、フィットしないこと自体がアートのテーマとなる。

ウ アート写真を製作する際、作品のテーマに合っているかどうかすぐには分からなかったとしても、身体的に何かを感じとったものを撮ることで、撮るものに意味を与え、豊かなイメージを見つけることができる。

エ 一般的なアートの〈発表〉では、作品にどのようなメッセージがあるのかを完成した作品とともに言葉で明確に表明したとしても、見る側が求めるアイコンセプトに合わなければ、作品が評価されないこともある。

いなかったイメージを徐々に纏めていくのだ。こういう創作の方法に慣れていくと、ものごと全般について、最終形がはじめから見えずることに、抵抗を感じるようになってくる。むしろ逆に、先が見えない、なにも決まっていないということに真実味を覚え、それがごく当たり前の状態に思えてくる。

しかし、アートの世界にも、はっきりとした目標設定や答えを必要とされることがあり、ぼくはときどき、そのことに疑問を感じる。「作品には、どのようなメッセージがあるのか」を作品とともに言葉で表明するが、一般的なアートの〈発表〉の流れになる。もちろん見る側が理解を深めやすくなるので、そういった環境を提供する目的もあると思う。ぼくとしても、漠然とながらテーマをもって写真を撮るわけだから、なにかしらは言うことができる。

ただ実際のところ、これらのメッセージは、作品を完成するまではっきりと纏んでいないこともよくあるのである。そして、写真を撮り終わり、プロジェクトとしてまとめあげた後、完全にクリアになっているかといえば、そうとも限らない。このことは、「コンセプトがはっきりしていない」という理由で、減点の対象となることもある。とくに欧米のマーケットはシビアである。

自分、人間というのは、そんなになにかも分かっているものだろうか。自分のことだからといって、すべてのことがたしかだと言えるだろうか。写真を撮るのには、撮るものに意味を与えるためではなく、よく分からないものでも、身体的になにかを感じとり、撮るのである。自分のおこったことすべてに説明をつけていこうという姿勢は、自分が何者かを常に固定して生きなくてはいけない社会の生きづらさにも通じている気がする。人が窮屈になるのは、いつもこういう仕組みから抜け出せないからだ。

なにか不確かなものがあり、自分の心と世の中がフィットしないときこそ、実はアートの出番なのだ。フィットしないことが、そのままテーマになる。はっきりしないことを、必ずしもはっきりさせる必要はないと思いたい。そういったところに目を向けてくと、豊かなイメージの源泉が見つかる。

(長谷良樹「定まらないアート」による) 彩流社

(注) コンセプト＝全体を貫く統一的な視点や考え方。マーケット＝市場。シビア＝きびしいさま。

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

配載のり 掲げま 者でお 権点て 著ら時 作ら点 著か現 控

1 とあるが、次のうち、このことばの本文中での意味として最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア おもしろみのないこと

イ 伝統を重んじていること

ウ 考えもしなかったこと

2 次のうち、本文中のAで示した和歌の内容を説明したものとして最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

ア 誰も訪れない山里に咲く桜の花を、風が惜しんでいるように感じられるということが詠まれている。

イ 山里に咲く桜の花を見に来る人がいないことを、風が惜しんでいるように感じられるということが詠まれている。

ウ 風によって人が帰ってしまったことを、山里に咲く桜の花が惜しんでいるように感じられるということが詠まれている。

エ 人の代わりであるかのように山里に訪れていた風を、桜の花が惜しんでいるように感じられるということが詠まれている。

3 本文中のAで示した和歌が詠まれた背景について、筆者が推測している内容を次のようにまとめた。 a、b に入る内容を本文中から読み取って、現代のことばで書きなさい。ただし、a は二十五字以内、b は十文字以内で書きなさい。

a という状況の違いから、山里には b ことに気づき、この和歌を詠んだと、筆者は推測している。

三 次の問いに答えなさい。

1 次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書で、大きくていねいに書くこと。

- (1) 朗らかな春の日。
- (2) 太陽が発電で電力を賄う。
- (3) 雑草の繁殖を抑制する。
- (4) 日が暮れてきたので「エジ」を急ぐ。
- (5) チンラン社会に絵画を出品する。
- (6) 人工「エイゼイ」を打ち上げる。

2 次のうち、「道真」と熟語の構成が同じものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 僅差
- イ 就職
- ウ 緩慢
- エ 授受

3 「遠」は、あるひらがなのもとになった漢字である。次のうち、そのひらがなとして最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア え
- イ さ
- ウ む
- エ を

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言葉によって人間は他者に向かって自分を開く。なにかを伝達したいという欲求、自分を理解してもらいたいという欲求から、人は文章を書く。だが同時に、言葉によって人間は他者に向かって自分を閉じる。自分の存在を他者から区別したいという欲求、理解されようがされまいが自分の輪郭をはっきりさせたいという欲求からも、人は文章を書く。自分を開くことと閉じることとは、ひとつの文章の中で必ずしも矛盾しない。

少々意味はずれてくるけれども、それを分析と総合というふうにいひかえてもよい、また部分と全体というふうにも言うこともできるかもしれない。言葉にはものごとを切りはなし、区別してとらえようとする機能も、ものごとを集め、むすびつけてとらえようとする機能が同時に存在している。たとえば日本語の

言葉は私は見出せない。見出せないと書くことで、かろうじて私の内部にぼんやりと幻のような想念が保たれているが、もしそういう言葉があり得ないのだとしたら、こういうふうによくこと自体、言葉を混乱させるだけかもしれない。

私たちの話し、書くどんな言葉も、単位としてはすでに言語の中に存在している。しかし私たちは単位の新しい組合せを創ることで、不断に言語をよみがえらせている。言語の限界に人を気づかせ、それを超えることを夢見させるのもまた言語の内蔵している大切な働きのひとつだろう。

(谷川俊太郎『詩を書く』による)

思潮社

- 1 俳句のような短い形の文章がいまいきと具体的に、一本の木の姿を表すこともあるとあるが、本文中で筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめた。
- a、
  - b
- それぞれ本文中から抜き出さないさい。ただし、a は十五字、b は十六字で抜き出し、それぞれ初めの六字を書きなさい。

俳句のような短い形の文章であっても、a がすぐれているものは、b から。

2 次の(i)～(iii)は、本文中の②に入る。②の前後の内容から判断して(i)～(iii)を並べかえると、どのような順序になるか。最も適しているものをあとから一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- (i) ひとつのなにかは、常にかのなにかとの関係においてのみ、なにかであることができるからだろう。
- (ii) なにかを伝えたいと思って、そのなにかにのみ固執しつづけると、肝心のなにかが分からなくなってくる。
- (iii) なにかと他のなにかとは、すなわちひとつの言葉と他の言葉ということになる。

- ア (i) ↓ (ii) ↓ (iii)
- ウ (ii) ↓ (i) ↓ (iii)
- オ (iii) ↓ (i) ↓ (ii)
- イ (i) ↓ (iii) ↓ (ii)
- エ (ii) ↓ (iii) ↓ (i)
- カ (iii) ↓ (ii) ↓ (i)

木という言葉は、その指し示しているものが、岩でも人でも空でもなく、木であると区別しているが、同時にその同じ言葉が、松や杉や栗や樺などの種をひとまとめに木であると総合している。

もし私がいま、窗外に見えている一本の木を描写しようとする、私はその一本の特定の木、具体的な木について、たとえば葉がみんな落ちていて裸であるとか、幹にきつづきのあけたらしい穴があるとかいうことを書いてゆくだろう。その他にもその木がどんな場所に立っているか、時刻は何時頃か、光の具合はどうかということなども必要になってくるかもしれない。

だがいかにか詳しくその一本の木を描写していても、その木のありさまがちょっと読み手に伝わらぬことがある。むしろ余りに精密に分析的に書きすぎると、かえって木の像はぼんやりしてくる。反対にたとえば、俳句のような短い形の文章がいまいきと具体的に、一本の木の姿を表すこともあるのだ。言いかえると、私が一本の特定の木のありさまを言葉によって、すなわち文章によって他者に伝えようとする時、その木は他の無数の木と区別されながらも、同時にそれらとむすびつけられ、ひとつのものとしてとらえられなければならない。

木という一語の中にすでに、そのような働きが内在していると言えるだろう。木はひとつの概念として、その発生から現在に至る地球上の木の総体を意味しているはずだが、私たちが木という言葉聞いて思い浮かべるのは、ほとんどの場合、一本の木である。地球上のすべての木を、一本の木という形で代表させることのできるのが、言葉の便利さというものだろうか。けれどそこにはまた、人間の頭脳の限界と、それに伴う言語の限界もはっきり表れているように思う。

たくみな随筆などに、すぐれたデッサンを思い起こさせるようなもののあるのは、分析と総合のバランスのとれたうまさ、共通点があるからだろう。一本の線が、余白にまさまさとの形を浮かびあがらせるように、すぐれた文章は部分を書くことで、全体を指し示す。これはものの描写に限らない。観念を書く時も、自分の内面を書く時も同じだ。

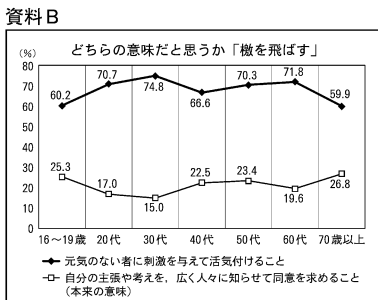
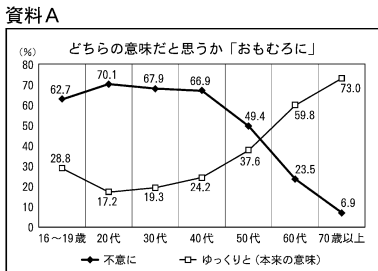
どんなに精密に使おうと思っても、言葉の解像力には限界がある。どんなに正確に使おうと思っても、言葉は生きた人間の間で、にじみ、揺れながらなければ流通しない。

言葉によって自分を、或いは対象を開くこと、言葉によってそれらを閉じることが、ほんとうは同じひとつのことなのかもしれない。だがそのことを言

3 言語の限界について、本文中で筆者が述べている内容を次のようにまとめた。a に入る内容を、本文中のことばを使って四十文字以上、五十文字以内で書きなさい。また、b に入れるのに最も適しているひとつづきのことばを、本文中から十四字で抜き出さないさい。

言葉には a というところに、人間の頭脳の限界と、それに伴う言語の限界が表れており、言葉における b によって、人間は絶えず言語に活力を与え、その限界を超えようとしている。

5 次の資料A、Bは、「おもむろに」と「榎を飛ばす」の二つのことばについて、「どちらの意味だと思つか」という質問に対する回答結果を表したものです。これらの資料からわかることをふまえて、あなたがコミュニケーションを図る際に心がけたいと考えることについて、別の原稿用紙に三百字以内で書きなさい。ただし、あとの条件にしたがって書くこと。



(資料A、資料Bともに「国語に関する世論調査」(文化庁)により作成)

条件 資料A、Bの少なくとも一つについてふれること。ただし、どの資料を参考にしたのかがわかるように書くこと。

三 次の問いに答えなさい。

1 次の(1)～(3)の文中の傍線を付けた漢字の読み方を書きなさい。また(4)～(6)の文中の傍線を付けたカタカナを漢字になおし、解答欄の枠内に書きなさい。ただし、漢字は楷書で、大きくていねいに書くこと。

- (1) 朗らかな春の日。
- (2) 太陽が発電で電力を賄う。
- (3) 雑草の繁殖を抑制する。
- (4) 日が暮れてきたので「エジ」を急ぐ。
- (5) チンラン社会に絵画を出品する。
- (6) 人工「エイゼイ」を打ち上げる。

2 次のうち、「道真」と熟語の構成が同じものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア 僅差
- イ 就職
- ウ 緩慢
- エ 授受

3 「遠」は、あるひらがなのもとになった漢字である。次のうち、そのひらがなとして最も適しているものはどれか。一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- ア え
- イ さ
- ウ む
- エ を

四 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

言葉によって人間は他者に向かって自分を開く。なにかを伝達したいという欲求、自分を理解してもらいたいという欲求から、人は文章を書く。だが同時に、言葉によって人間は他者に向かって自分を閉じる。自分の存在を他者から区別したいという欲求、理解されようがされまいが自分の輪郭をはっきりさせたいという欲求からも、人は文章を書く。自分を開くことと閉じることとは、ひとつの文章の中で必ずしも矛盾しない。

少々意味はずれてくるけれども、それを分析と総合というふうにいひかえてもよい、また部分と全体というふうにも言うこともできるかもしれない。言葉にはものごとを切りはなし、区別してとらえようとする機能も、ものごとを集め、むすびつけてとらえようとする機能が同時に存在している。たとえば日本語の

言葉は私は見出せない。見出せないと書くことで、かろうじて私の内部にぼんやりと幻のような想念が保たれているが、もしそういう言葉があり得ないのだとしたら、こういうふうによくこと自体、言葉を混乱させるだけかもしれない。

私たちの話し、書くどんな言葉も、単位としてはすでに言語の中に存在している。しかし私たちは単位の新しい組合せを創ることで、不断に言語をよみがえらせている。言語の限界に人を気づかせ、それを超えることを夢見させるのもまた言語の内蔵している大切な働きのひとつだろう。

(谷川俊太郎『詩を書く』による)

思潮社

- 1 俳句のような短い形の文章がいまいきと具体的に、一本の木の姿を表すこともあるとあるが、本文中で筆者がこのように述べる理由を次のようにまとめた。
- a、
  - b
- それぞれ本文中から抜き出さないさい。ただし、a は十五字、b は十六字で抜き出し、それぞれ初めの六字を書きなさい。

俳句のような短い形の文章であっても、a がすぐれているものは、b から。

2 次の(i)～(iii)は、本文中の②に入る。②の前後の内容から判断して(i)～(iii)を並べかえると、どのような順序になるか。最も適しているものをあとから一つ選び、記号を○で囲みなさい。

- (i) ひとつのなにかは、常にかのなにかとの関係においてのみ、なにかであることができるからだろう。
- (ii) なにかを伝えたいと思って、そのなにかにのみ固執しつづけると、肝心のなにかが分からなくなってくる。
- (iii) なにかと他のなにかとは、すなわちひとつの言葉と他の言葉ということになる。

- ア (i) ↓ (ii) ↓ (iii)
- ウ (ii) ↓ (i) ↓ (iii)
- オ (iii) ↓ (i) ↓ (ii)
- イ (i) ↓ (iii) ↓ (ii)
- エ (ii) ↓ (iii) ↓ (i)
- カ (iii) ↓ (ii) ↓ (i)



受験 番号	番
----------	---

○

- ・原稿用紙の正しい使い方にしたがって書くこと。
- ・題名や氏名は書かないで、本文から書き始めること。

得点	20
----	----